

Trial & Error

1981 年も難民はまだ ……



目次

- P. 2 難民救援活動の2年目を迎えて 星野 昌子
P. 3~5 1981 年も難民はまだ …… 水野 孝昭
P. 6~7 J.V.Cとそのボランティアたちに期待すること 栗野 鳳

- P. 8~13 各キャンプ最新情報
P. 14 ブリラム県児童施設建設プロジェクト紹介
P. 15 東北タイ概観 田島 誠
P. 16 投書, J.V.Cの位置関係図
P. 17 テーマ研究 水野 孝昭
P. 18 書評 須藤 達也

第2号

Jan. 1981

JAPANESE
VOLUNTEER
CENTER

難民救援活動2年目を迎えて

J.V.C事務局長 星野昌子

快適な気候の乾季が訪れたとはいえ、まだエア・コンを必要とするバンコックを離れて、12月7日から2週間を寒波に見舞われた日本で過した。去る2月J.V.Cの発足以来、支援を続けて下さった団体への報告を主な目的とする旅だった。巷には流行の服装に身を包んだ男女の学生が、この寒さで絶好のスキー場行きを語るのを再三耳にした。楽しかるべき語らいの中の倦み疲れたような響きが気になった。終電間近の駅や車中には、飽食のお釣りが酒にまみれて散在し、一杯機嫌の社用族が上役をこき下ろし、ゴルフ、マージャンの腕を自慢する会話は、幼児のそれかと耳を疑う。

12月19日付の朝日ジャーナルを手にすると、論文「飢餓問題と日本の役割」で第1回「佐藤栄作賞」最優秀賞を受けた学生田尾正子さんがその動機と背景を語る中で、現代の日本人について、「物質的豊かさの中に埋没しながら、心の拠りどころがなく、自由はふんだんにありながら目標がなく、情報は満ち溢れても自分や世界を捉える信念

・体系も持たない」と述べ、「真の国際社会とは運命共同体としての共通の責任感から、例えば隣国である東南アジア諸国に対し、援助協力を惜しまないような社会を指す。そしてわれわれ若者の捨て身の援助こそが必要だ」と続けている。

ところで、インドシナ難民救援活動のため設立されたJ.V.Cにはこの10ヶ月の間に、多数のボランティアが殆んどの場合全くの自己負担で駆けつけ、「この頃の若者」批判を吹きとばす着実な働きを見せてくれている。難民救援の現場での調査・企画・活動実施にせよ、帰国後、東京リエゾンオフィス（連絡事務所）で情報をまとめ、勉強会を開くにしても、創造性と自主性に溢れ、熱気を伴う集中力で見事な燃焼ぶりを示す。

質の高いボランティア活動にどの位かかわっているかということが、その人を評価する上で大切な要素に数えられる先進国では、その活動が学校のカリキュラムに組み込まれ、単位として認められるところも多いと聞く。又社会人となっても、実力本位の

雇用制度の中で再三、再四の転職が当り前のところでは、個人が一生の間のある期間難民救援に参加することは難かしいことではない。しかし日本のような終身雇用制度の確立した社会で、学校を出ると同時に就職し、それがその人の一生を支配するような国では、これは又恐ろしく勇気を要する業なのである。現状では長期的にこの仕事にたずさわろうとすれば、自由業で生きられる技能を既に持ち合わせている少数の人々を除いて、日本の体制の中で当り前の生き方をすることを或る意味で捨てる覚悟をしなければならない。従ってこの10ヶ月に参加したボランティアの多くは、短期間で去るか、学校や会社の

休暇を利用して時々短期的にかかわるしか道がない。何人かの人がこの仕事を続けるため、学校を、会社を既に辞め、又辞めようとしている。又残りの大勢の心がこの仕事に意義を認め、生甲斐を覚え、続行に心曳かれながら、安定した生活に繋がる道との板ばさみに逢って、大きく揺れ動き、迷っている。



JVC Tokyo liaison office にて(12/11)

前述の田尾さんは「われわれ若者の捨て身の援助こそが必要なのであって、生半可な国際理解や救済のかけ声だけでは、この深刻な問題は解決されない。私はそれを為政者や政府の役人に対してではなく、われわれ若者自身に訴えかけたかったのである」と結んでいる。

しかしJ.V.Cを通じて、困難をおして隣人の救援に参加する日本の若者達が此処に確実に存在し、後を断たないのだ。これからの問題はむしろこうした人達を力づけ、支援し、息の長い活動を可能にするような社会へと日本が変って行けるかどうかにかかっているのではないだろうか。このまま放っておけば、難民救援は一つのファッションと消え、「他所の国に難民が出ようが、恵まれない人がいようが、日本と一体何の関係があるのか」といった気分が再び日本全体を支配し、1973年前後に起きた東南アジアに於ける反日運動が既に大方忘れられているように、再び新たな難民の流出に際して、「立ち上がりが遅い、日本人の心は鬼か」等々の批判を受けねばならなくなるのだろうか。

幸い「インドシナ難民救援連絡会」の各団体、又

は個人の方からの理解と支援を得て、1981年にJ.V.Cが現在の規模での活動を行く資金的見通しはどうやら出来た。又ボランティア確保の面でも企業労組の福祉部、文化団体の青年部等がこの方面にかかわって行こうとする前向きのアプローチを見せ始めていることが、前途にかすかな希望を与えてくれる。

◆ ◆ ◆
 終りに付け加えたいのは、今私がここまで述べて来たことは、タイで現在活躍する40余りの外国救援団体の一つであるJ.V.Cにとって本質的な問題ではないということである。他の諸団体は世界中の難民流出地域数10ヶ所に、とうの昔から組織的救援の手を差し伸べることによって、先進国としての義務を

果たすことを、当然のこととしている国を母体としており、その中の1カ所としてインドシナ難民にも経験豊かな安定した活動をくり広げている。J.V.Cは私達の現場での活動を可能にしてくれる母体である日本が、海に囲まれ、ついこの間迄世界の難民に目を向けたことがなかった、という特殊事情から前述の問題を、さらに背負わされている。

1981年にJ.V.Cが取組まなければならない本質的な課題は、同じアジア人の心で、難民と同様の窮状に直面している人々が置かれている立場を深く理解し、彼等の望むやり方で、救援活動の質的、技術的向上と充実に努めることである。

1981年1月1日バンコクにて

1981年も難民はまだ…

水野孝昭

先月20日、上智大学において、J.V.C主催のシンポジウム“1981年も難民はまだ…”が開催された。当日は年末にもかかわらず、200名近くの人々が集まり、熱のこもった報告・討論が夜の8時まで続けられた。

当日の報告・討論の要旨をレポートする。

◆ ◆ ◆
 1979年の暮、新聞・テレビでは連日、カンボジア難民の悲惨な状況を伝えていた。その報道に接して、難民のために何か行動を起こしたいと考えながらも、その手段が身近に見出せず、残念に思っていた人は決して少なくなかった。

こうした人々の有形無形の支援を得て、年が明けるとともに日本のインドシナ難民救援活動は急速に盛り上った。従来のような、海の向うのことはおまかせという政府一辺倒の姿勢を脱却し、その力はバンコクにJ.V.Cの設立という形で結実した。新しい民間救援活動のパイプが、日本の民衆とインドシナ半島の人々とを繋いだのだ。

それから約1年を経過した今、このパイプが、現地の状況の変化に的確に対応し、更に質を高めて太いものになっていくのか、あるいは潮が引くように消え去っていくのか、私達は重大な岐路に立っている。

改めて、今、キャンプ生活を余儀無くされている難民達のことを心に思い浮かべてほしい。

当初のような、飢えとマラリヤとに苦しめられ、1日に何十人もの人々が次々と倒れ、埋葬が追いつかず死体をブルドーザーで埋め立てていくという

地獄図は、既に過

去のものとなった。現在ではどのキャンプでも医療・食糧等一応の条件は満たされ、難民の生活もそれなりの落ちつきを見せ、子供達は元気に走り廻っている。

この光景を一目だけ見た人は、「難民のくせに恵まれ過ぎている。」とか、「もはや援助の必要は無い」とかいう結論を下すのかもしれない。

◆ ◆ ◆
 しかし、改めて問おう。一体難民問題とは何なのか。単に食糧と薬とを配布すれば、それで解決するものなのか。

いやむしろ、どれだけ物資が行き渡ろうとも、自分の人生を自分の手で切り開いていくことが許されぬまま20万人にのぼる人々が鉄条網の中に閉じ込められ続けていることにこそ、難民問題の本質が端的に表出しているのではないだろうか。

難民キャンプの「繁栄」は、所詮、国際救援活動の上に咲いた“仇花”に過ぎない。それは援助を打ち切られた途端、たちまち枯れ去ってしまう。こうした不安定な状態を強いられ、生産的な活動に携わることができず、日々を徒らに過ごさねばならない彼らの苦しみを、現地を踏んだ私達でなくて誰が感じ取ることができようか。

プログラム

1. インドシナ難民は今
星野昌子 J.V.C事務局長
2. 「流民」とは？
小松隆二 慶応大学教授
安藤 勇 上智大学教授
小松秀子 国際親善の会事務局長
3. 難民の日本定住について
内藤健三 大和定住促進センター所長
4. 討論会

事態はもはや、緊急援助の段階では無い。この人々が、自分の足で立っていき、自分の手で祖国を再建していくために、あくまでも外国人に過ぎない私達に一体何ができるのか、そこには一段と次元の高い考察が求められている。長期的な展望を持った、より本格的かつレベルの高い援助活動が必要な時期なのだ。その困難さは、緊急援助に勝るとも劣らない。

J.V.Cの星野昌子事務局長が一時帰国をした機会を捉え、以上の観点から、今後の救援活動のあり方を考えるため、J.V.Cの活動を中心に現地の状況を報告して頂いた。

◆ ◆ ◆
星野さんは、まず簡単にJ.V.Cの設立経過・活動概要を述べた後、今後国連やタイ政府から拡大を要請されている活動分野として、ウボンの自動車整備教習所、ソクラーの公衆衛生施設整備、パナニコムの一時的滞在所(Transit Center)の教育レクリエーション活動の3つを挙げた。発足以来10ヶ月のJ.V.Cだが、確かに経験の点では百年にも及ぶ伝統を持つ欧米のボランティア団体には及ばないものの、一部には“出稼ぎ意識”さえ見られる彼らに対し、ボランティア・スピリットの面、各プロジェクトがどこまで難民の立場に立って考えられているかという活動の質の面では一歩も退けをとらないと自信を持って語り、その具体的な例として、ウボンの自動車整備教習所の建物を建設するに際し、J.V.Cがかけた費用は、国連の見積りの半分以下であったことを挙げた。

こうした話には、国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)の予算の半分以上、1年に約1億ドルを拠出している私達日本国民としては無関心ではられない。

反面、こうした一銭たりとも無駄にすまいというJ.V.Cの活動姿勢によって、結果として利益を得られなくなる層もあり、その反感を買わないよう慎重さが必要とされることを述べた。この点が他国で、しかも更に別の国の難民のために活動する際に伴う困難の一つだろう。

その後フォトジャーナリスト野中章弘氏が提供してくれたスライドを上映し、各地の状況を具体的に説明した。

◆ ◆ ◆
現地での救援活動とともに、日本人である私達にとって日本国内で起きている難民問題も看過することはできない。J.V.Cはバンコクで設立されたこともあり、従来現地へ飛び出してきたボランティア達

の受皿であった。しかし、現地で活動したボランティア達がどんどん帰国してくるのだから、今後は日本国内の難民や、それと同様な状況にいる人々に目を向けていくことになるだろう。

今回は、その第一歩として、二つの問題に焦点をあてた。定住難民と「流民」である。

定住難民の問題に関しては、彼らが本当の意味で日本に定着できるかどうかがかまきに「試金石」となる。つまり、単に法律上の手続きのみならず、私達が気持の上で彼らを当り前の人間として「受け入れ」られるかが問題なのだ。

タイの難民キャンプでは、私達是否応なくボランティアと難民、助ける者と助けられる者という構図に押し込められざるを得ない。そこでは私達はどこまでも「良い人」であり、難民は笑顔をみせ続けるだろう。

それに対して、彼らが日本に来て、私達の生活の中に入り込んで来た時に、私達自身が対等の立場で、友人の一人として接しうるか否かによって、私達自身の活動が単なるチャリティー、弱者への施しであったのか、それともより深く普遍的な何物かに根ざしているのかが明らかになるだろう。

「受け入れ」によって難民問題が解決するのではなく、逆に時間の経過とともに、様々な問題、困難ではあるが日本が本当に開かれた社会となるために、必ず解決しなければならない問題が次々に露呈されてくるだろうし、現にされつつある。

例えば、10月20日に報道された鳥取の小学校での難民の児童受け入れ拒否事件は、その最も典型的なものだろう。

難民を阻んでいるのは、私達自身の排外的閉鎖的な意識そのものなのだ。その反映として「外人」に対する様々な制度上の不備、制限がある。具体的には、既に82ヶ国が締結済の「難民条約」に未加入であること、厳しい国籍取得条件、国際結婚した夫妻の子供の国籍取得に関する父系主義等に表われている。

内藤健三大和定住促進センター所長も、センターの目的として難民が自立するための教育訓練と並んで、日本人の排他性を無くしていくことを挙げた。

今年は国際障害者年である。UNHCRも「10以上」(Ten or More)計画として、毎年10組以上の障害者の難民を、家族を含めて受入れる約束を、国土が狭くて多くの難民を受け入れることのできない国と恒常的に結んでいる。ベルギー・オランダ・ニ

Your sympathy
cannot help a refugee.



But it is a beginning.



ユーゲランド・英国・ノルウェーがその参加国である。スイスは独自に身障者難民の受け入れを進め、スウェーデンの場合、78年に受け入れた難民234名中86組が身障者難民とその家族であった。

国連は、今回タイを訪れた日本政府の定住希望者調査チームに対し、難民を多くは受け入れられない日本の特殊事情は理解できるので、是非、前記の国々にならい、身障者難民を受け入れてほしいと要請した。

身障者難民の受け入れは、私達の財政負担になることを十分認識した上で、国際社会に他に代わりうる国が無いことを考え、「一国福祉主義」を突破する契機として、何とか実現したい今後の大きな課題である。



同じく難民の境遇でありながら、遇々タイ・台湾等で正規のパスポートを入手して日本に入国し定着したために、不法滞在者として逮捕拘留され、場合によっては退去強制までされるという「流民」たち。先日「在日インドシナ流民に連帯する市民の会」編で出版された「流民 — 悲しみはメコンに流して」の中は、その悲惨な実状が詳しく述べられている。この日に「流民の会」の安藤勇神父と小松隆二教授に更に敷衍して頂いた。

在日22年で日本に帰化した安藤神父は、「流民」問題にぶつかって、初めて日本人となったことに恥ずかしくなると語り、誰にでも起こせる行動として、現在横浜拘置所（横浜市中区本牧大里町155）に拘留中の「流民」林静君に励ましの手紙を書くことを訴えた。

次いで小松教授は、自らアジア人であるのにも拘らず、日本人が他のアジア人に対して抱いている不当な蔑視と、経済性の尺度でしかものを見ない効率第一主義とが、現在の難民「流民」問題の根底に横たわっていると指摘した。

「流民」の救出・保護の先頭に立って奔走している国際親善の会の小松秀子事務局長は、難民条約の批准にせよ、「流民」問題の解決にせよ、一人一人が声を上げ、政府に働きかけていかない限り状況は変わらないことを強調し、政府部内での人事の動き等を報告した。

休憩の後の予定時間を大幅に超過した第二部の討論にも、半数近い聴衆が参加した。そこで問題点として挙げられたのは、①第三国に再定住した難民にとって、祖国とはどのような意味を持つのか。現状が変われば、彼らは帰国するのか。②難民・「流民」を里親として引き取る方法と、その事例。③日本の

難民条約批准にはどんな障害があり、その批准によって難民・「流民」の扱いがどう変わるのか。④難民の日本定住を阻んでいる物は何か。という点であった。

①については、先進国でどれ程豊かな生活を送っているようにも、彼らの多くは今も切なる望郷の念を抱いていることが、フランス・オーストリアでの体験を基に報告された。

②については、孤児はそもそも日本の定住条件の対象外だが、勉学の為のスポンサーという形なら前例もあること、短期の里親制度は、「流民」問題解決の一助となりうることが述べられ、③については、難民条約の難民要件が相当厳格であるため、それだけで難民「流民」問題が一挙に解決するわけでは無いが、年金健保等社会保障制度に加入できるようになる点でその第一歩であることは間違い無く、在日朝鮮人の人々も同時に対象となるため影響は大きいことが確認された。

論議の中心となった④については、最大の障害は具体的にはやはり日本語の習得の困難さにある。定住促進センターでの三ヶ月間の教育では不十分であり、就職後も会話の不必要な現場の仕事に回されるため、一向に日本語が上達しないという悪循環がある。彼らに各種学校なり、上級学校なりに進学して技術を身につけようと必死なのだが、その時言葉の壁に突き当たる。この点はJ.V.Cの現地での日本語学校、センターでの教育、就職後のボランティアとが有機的な一貫教育体制をとれば、改善の余地はある。



シンポジウム「1981年も難民はまだ……」

上智大学3-248教室にて(12/20)

発言者が各々の現場で、日夜難民と接している方ばかりであったため、突っ込んだテーマについて貴重なお話が伺えた。立場こそ異にしても、同じ一つの問題に取り込んでいることが改めて確認できたのは、何よりの収穫だった。

J.V.Cとそのボランティアたちに期待すること

広島大学平和科学研究センター長 栗野 鳳

去年のはじめ頃、カンボジア難民にたいする各国の救援団体の援助がようやく本格化したにもかかわらず、「日本は金は出すが人は出さない」などという批判が起り、また、「遅ればせ」ながらも現場にかけつけた日本人ボランティアが欧米の救援団体の仲間に入れてもらえないで、すすごく立ち去らなければならないという新聞報道を目にした。私はこれらの日本人ボランティアたちの悲憤に共感をおぼえ、もし立場が逆であったら、つまり日本の救援団体の活動に欧米のボランティアがジョインさせてほしいといってきたら、きっと快く受け容れてあげただろうに、と想像し、だが、そのような時期がくるのは何年先のことだろうかと思うと誠に悲しかった。

その後、4月から年末まで、インドシナ難民にたいする救援活動を計画、統括し、自ら実施するとともに、各国の救援団体に委託もしているUNHCRバンコク事務所で、東南アジア地域調整官という肩書きをもつ最高の責任者にたいする特別顧問として、私自身が勤務することになり、UNHCRの側から各国の救援団体の活動を見る機会に恵まれた。

2月に発足したJ.V.Cは、日本からやってくるボランティアたちに適切な奉仕活動ができる場を提供する「クリアリング・ハウス」的な役割を果たしていた。

それから約8カ月たって、UNHCRバンコク事

務所は、初めての日本語の解説的資料「UNHCRの役割と活動」を作成した（これは1981年1月末頃、日本で配布される）が、その中の「タイにおけるインドシナ難民救援」の項の末尾に日本の寄与が記されており、J.V.Cについては次のように書かれている。「(J.V.Cは)日本からきたボランティアたちやタイ在住の日本人の主婦のボランティアたちを組織し、UNHCRの事業に協力するための種々の計画を立案実施し、活発に活動している」。創立いわずか10カ月で、J.V.Cは、このように評価される救援団体に立派に成長したのである。そして、嬉しいことに、他の団体に働く場所がえられなかった欧米人のボランティアたちも（常に幾人か）、日本人といっしょになってJ.V.Cの計画の下で活躍しつつある。

これらのJ.V.Cの活動について、J.V.Cの11月の月例会での「あいさつ」の中で、私は次のように述べた。「タイその他東南アジア各地に滞留している約30万人のインドシナ難民の全体について概括的にいえば、難民は緊急事態を脱し健康をとりもどしているが、これから、恒久的な解決のための各種の措置が必要である。その一つとして、いままで手につける機会がなかった難民たちに職能訓練を施すことがあり、UNHCRもこれに力をいれようとしている。J.V.Cが熊岡さんの企画、指導でウボンのラオス難民キャンプで実施してきた自動車エンジン整備の訓練コースの成功を見て、UNHCRはJ.V.Cにたいし、カオイダンなどのカンボジア難民についても、本国への帰還の日に備えて、同様な職能訓練コースを早く開設してほしいと要望した。

そして12月18日、私と家内と熊岡さんはカオイダン・ホールディング・センターを視察した。そこには、UNHCRの「コンストラクション・ユニット」が設立されて、センター内の諸施設の整備に当たったわら、職能訓練や技術教育のための教室も建てられ、一部の授業も始められていた。UNHCRの担当官と、それに献身的に協力しているカンボジア人専門家（ちなみに、この人は家族全員が「ボルボト」軍に殺され、自分だけ辛うじて生きのびたそうであるが、そのかつての上司はカンボジアでのトップ・クラスのエンジニアであった某氏で、しかも私と旧知の間柄であった）と、熊岡さんの三人が、早くも

We can all be here.



The question for a refugee is where and how.



UNHCR is the office of the United Nations High Commissioner for Refugees. Our job is to coordinate the world's efforts to solve refugee problems and to give the rights of man back to refugees. The right to work, education, freedom of religion, travel documents, legal protection. We do not ask you to help to support refugees for ever and ever. We need your help to make refugees self-sufficient. Using a useful, practical and happy life somewhere in the world. Here is your chance.

訓練コースの構想を話し合っているのを見て、私は心から嬉しかった。

なお、カオイダンでは、「幼い難民を考える会」のいいぎり・ゆきさんの企画と指導で三人の日本女性が幼児教育と保母さんの訓練を実施しているが、この事業もUNHCRによって高く評価されている。同じカオイダンで、同じく期待されているJ.V.Cと「幼い難民を考える会」のボランティアたちが、お互にはげまし合って活動していく光景を想像することは、誠に心温まる思いのすることである。

さて、J.V.Cなどのボランティアたちへの私の期待は、このような点だけではない。それは、もっと奥行きのあるものである。それは、国際社会への日本および日本人のかかわり方に関連する。インドシナ難民救援について日本人が「立ち上りが遅れた」といわれる問題も、氷山の一角と見られるものであった。

かつてパキスタンの首脳が日本人を評して「エコノミック・アニマル」といったが、当の日本人の方は、そのような批判などほとんど気にもとめず、ひたすら「経済大国」への途を邁進し、今や世界各地での「エコノミック・プレゼンス」の維持・拡大が「国策」の柱となっているかの観がある。

しかし、J.V.Cなどのボランティアたちは、難民や、それとほとんど違わない程度に恵まれないタイの人々にたいする救援活動を体験し、また、タイの庶民と同じような生活も経験して、その貢献に加えて、極めて貴重な真実を把握してきた。難民や困窮者や庶民がその境遇の中で本当に希求しているものは何か。諸外国に対して望んでいるものは何か。日本および日本人に期待しているものは何か。

「平和」「安定」「開発」などといっても、他国の「国益」のためや、いわんや「エコノミック・アニマル」の利己的目的などのために、「上から」押しつけられるものである限り、対象とされる国の国民にとって、とりわけ困窮者を含む庶民にとって、どれ程の意味があるであろうか。各国、殊に開発途上国の庶民の真のニーズをみとすためのものと、前記のようなマガイ物とを見分ける眼を、ボランティアたちは獲得してきたに違いない。

このようなボランティアたちにとって、日本国内で取りくむべき課題は数多くあるが、最近、目にあまる現象がある。それは、難民救援を表看板とする一部の政治運動や、使途も明示していない怪しげな募金活動である。政治運動じたいは、ここで批判のラチ外におくとしても、難民をダシに使ったり、「食

栗野 鳳氏の略歴

1920年生。1943年、東大法卒、外務省入省。在ニューヨーク総領事館領事を経て、1954年から国連関係、日本の国連加盟問題や軍縮・核実験禁止問題を担当。1958年から60年まで、初めての日本人職員としてウィーンの国際原子力機関に出向。帰国後、本省の国連局科学課長として原子力平和利用、ユネスコなどを担当。

その後、在カンボジア大使館参事官、外務省文書課長、アジア局参事官、在タイ大使館公使、在カンボジア大使、在シリア大使を歴任。1978年4月退官。

昨年4月から12月までUNHCR特別顧問として、バンコク同事務所に出向、この間J.V.Cの活動に深い御理解をしめされ、今後も御支援していただくことになりました。現在は、広島大学教授、同大学平和科学研究センター長。

いもの」にする行為は、それこそ「人道」の上から許し難いことである。このような動きから、難民と、その救援を本気で考える善意の日本国民とを守ることに、さし当り必要であると思われる。

もっとも、このような卑劣・低次元の「政治」にたいし、「政治的」に対応するのは賢明でも有効でもない。「超政治」の立場から対処する方策を考えなければならない。そこで、幾つかの示唆を述べれば、国際政治の錯綜した網の下をかいぐって人道的事業を進めている国際機関の行き方を参考にする、志を同じくする団体や個人が一層緊密に連帯・結束していくこと、そして、「知は力」であることを実証していくこと、である。

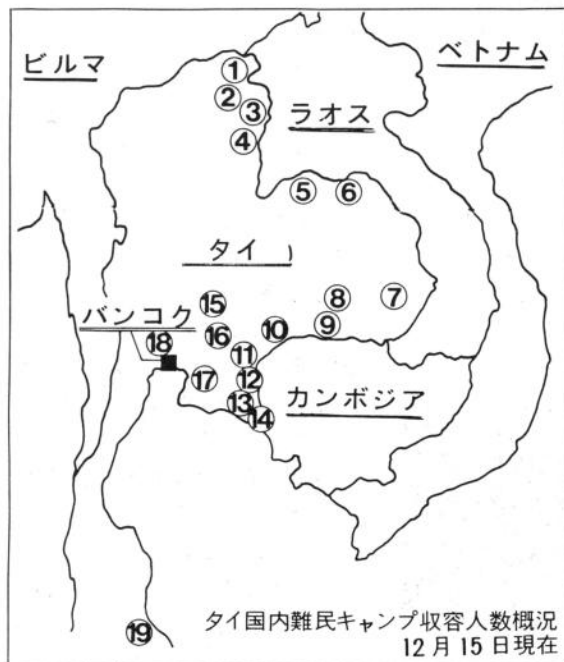
それにしても、容易に国際社会にミックスしようとしなない日本人の凍結した心、この氷山の全体を溶解させるためには、まだまだ相当の歳月がかかることであろう。恐らく、二十一世紀の日本においては、地球の一角に難民や困窮者がいることが分れば、日本人がすぐに駆けつけて救援活動をするのが、当然のことになり、政府も、「国際福祉・社会開発援助費」を毎年の予算の最優先事項にするようになっていく — というようなことを、今年の初夢に終らせないためには、ボランティアたちの「熱」でもって、氷の塊りをとかし続けていく必要があるであろう。

JVCプロジェクト状況

12月16日現在

キャンプ地	管 轄	進行状況	活 動 内 容	活動中のボランティア氏名
1.ウボン	内 務 省	● 自動車整備教習所（教官 8 人，生徒 130 人） ● 英語（生徒 450 人），日本語（50 人），ラオス語（25 人）各教室運営とキャンプ住民が個人的に開いている私塾の援助 ● 手工芸品（ショルダーバッグ，財布等）の購入販売 ● レクリエーション活動（5～8 才の子供達を対象に歌，体操，ゲーム等） ○ 織物の職業訓練校 ○ 妊産婦，乳幼児，病人への補助栄養食の供給活動 ① 食料の配給	* 熊岡路矢 金子一弘 大野直樹 山下夏美 マリー・マルティム・キャマル 浅井芳彦 藤山 学 青木哲子	
2.ノンカイ	内 務 省	● 日本語教室（生徒約 30 人） ● 教育レクリエーション活動（ラオス語，算数，図工，体育，音楽等，生徒 75 人）	* 森 豊文 久保貴弘 平賀増美 田中真理子 清水 稔	
3.ソングラー	内 務 省	● 排水溝工事（第 1 期工事終了） ● 公衆衛生（バキュームカー，ゴミ回収等） ◎ 使用済トイレットペーパーを焼く焼却炉製作 ● 手工芸品（ ）の材料供給と購入，販売 ● 保健衛生（眼薬配布） ● 緑化計画（花壇造設） ① キャンプ近隣のタイ農村への古着配布	* 浜口功雄 古賀道広 原田芙蓉 木原文雄 畠山 信 原 道治 篠 実 小野ヒロ子 戸田耐子	
4.アランヤプラテート	軍最高司令部	● 国境周辺の難民村，農村への物資輸送（衣類，日用品，学用品等） ● アメリカ民間救援団体 CARE の補助食料配布の援助	* 西崎憲司 田島 誠 村山康弘 河西マリ 王那覇陽子	
5.カオイダン	軍最高司令部	● 井戸掘りの技術指導 ○ 自動車整備教習所	* 養田健一	
6.バナニコム	軍最高司令部	● 教育レクリエーション活動（体育，ダンス，工作等）	* 相沢秀夫 小泉典江 鈴木ミナミ 高橋智子 川嶋和弘 山隈 悟 高橋玲子 小池泰明 柳沢道寛 ワニット	
7.クロントウーイスラム		● 通路補修 ○ 電気工養成訓練所 ● 学校の環境整備 ● サッカーグラウンドの建設（スラムの子供たちのために） ● スポーツクラブ運営に協力（用具の貸出し等） ● 洋裁学校（ブラティープ財団が運営）への協力。生地提供，デザインのアドバイス，販売 ● ブラティープ財団への奨学金援助 ◎ 小さな橋の構築（祭りのために）	* 福村州馬 小野博志 皆川伸彦 日高 一	
8.ブリラム県13ヶ村		○ 児童施設建設	山本敏幸	
9.バンコク事務所		● 手工芸品の購入，販売 ● 衣類の整理配給	星野昌子 山本敏幸 大石由美子 クリス・シュビルマン	

●実施中 ○計画中心 ①不定期に活動中 ◎完了 * キャンプリーダー



	キャンプ名	国別	今月	先月
1	チェンコン	L	—	5,607
2	チェンカム	L	—	3,498
3	バンナムヤオ	L	10,053	10,053
4	ソプトゥアン	L	—	8,363
5	バンビナイ	L	29,720	29,720
6	ノンカーイ	L	26,895	25,353
7	ウボン	L	19,007	19,130
8	ルンバック	K	—	2,530
9	カプチューン	K	—	2,429
10	カオイダン	K	76,663	—
11	アランヤプラテート	K	3,700	2,347
12	カンブット	K	15,896	15,896
13	ラエムシン	V	—	681
14	マイルート	K	—	13,681
15	シキウ	L.V	—	2,320
16	サケオ	K	35,000	—
17	パナニッコム	K.L.V	18,000	13,000
18	ルンビニ	K.L.V	—	—
19	ソクラー	V	2,860	2,860

収容されている難民の国別

K…カンボジア, L…ラオス, V…ベトナム

※「—」は情報未入

各キャンプ最新情報

ウボン

金子 一 弘

① 自動車整備教習所

将来、ラオスへ帰るか、又は第三国に定住する難民のための職業訓練校として、自動車整備の技術指導を行っている。教師にタイ人とラオス人の技術者を雇い、午前・午後の2回授業をしている。

開設以来、多くの人が出国していったが、教師の1人で、アメリカに定住したボラテさんから、トヨタに就職が決りそうだ、との便りもあった。

② 語学教室

他のボランティア団体と同様に、J.V.Cも語学教室を設け、ラオス人の教師と日本人ボランティアによって、授業を進めている。

●英語 14クラス 450人

今月からカリキュラムを組み直し、会話クラスも設け内容に膨らみを持たせた。

●日本語 3クラス50人

日本から日本語教育の専門家を迎え、より充実したものになった。

●ラオス語 2クラス25人

子供達を対象としているが、第三国に必要なのは英語やフランス語で、ラオス語は今話しているだけで充分と考える保護者が多く、あまり積極的ではない。



自動車教習所にて指導にあたる熊田市(ウボン)

③ 手工芸品の購入

ウボン在住のメンバーが、ショルダーバックや財布等の買い付けを毎月行い、バンコクに届けている。日本での販売も始まり、需要が増えたのだが、大量生産の出来る物でなく、難民の第三国定住が進むにつれて技術者が減ることもあり、供給が間に合わない状態である。

④ レクリエーション活動

11月27日より5才から8才までの子供達を対象に、英語と日本語の歌や体操・ゲーム等を始めた。

午前・午後の各1時間半ずつのクラスを設け、約80人の子供が毎日通っている。これからは、クラスを年齢別にして、内容を充実させていこうとしている。

⑤ 織物学校

自動車整備教習所と同様に、難民に対する職業訓練校として計画されたものである。現在、調査を終え、校舎を建設中。

※求められている人材

2. 栄養士もしくは看護婦1～2名。(妊産婦、乳幼児、病人への補助栄養食供給活動のため)
3. タイピングを指導できる方数名。

ノ ン カ ー イ

森 豊 文

①日本語教室

午後に毎日3時間、3ヶ月間で終了の日本語クラスが2つある。以前からのクラスの14人(そのうちの3人は子供)は既に定住許可の出ている人を含め、すべてが日本に定住を申請中。11月27日に新設したクラスの23人のうち5人が日本定住を申請中である。

テキストには「日本語の基礎」を使用し、授業中はラオス語は使わず、日本語会話の指導をしている。学習者が日本入国後遭遇するであろう場面を想定して実用的な文型の練習をしたり、日本の生活・文化・習慣等にも触れ、また3ヶ月の期間中にひらがなの読み書きができるように指導している。

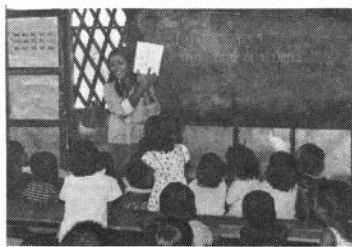
②教育レクリエーション活動

小学校建設がノンカイ県の承認が降りず実現しなかったのが、教育レクリエーションの内容を充実させて小学校の代わりとしている。11月17日から、それまでの2教室を竹で仕切り4教室にして新しいクラスを開設した。新設にあたり、開始前に家庭訪問をして子供を募集したり、クラス分けのため四則計算のテストをした。

毎日午前中3時間3ヶ月のクラスで生徒75人を「ある程度計算もできる9才以上」「文字が書ける7・8才」及び「5・6才」の3

クラスに分けた。時間割は一週間に算数5時間、ラオス語4時間、図工2時間、体育2時間、音楽及びレクリエーション2時間である。現在、教育要綱を作成中。

栄養の摂取状態が体重に表われるということなので、7才までの子供50人を対象に体重測定を行なった。間もなく、結果が出る予定。



読み書きを学ぶ子供たち
(ノンカーイ)

③その他

ノンカイ県の小・中学校30校にサッカーボールを寄贈した。

キャンプ内のラオス自治会に事務用品を毎月1,500B相当、現物で支給している。

※求められている人材

1. 日本語を教える資格のある方。
2. 教育レクリエーションに携わる方(保母またはそれに準ずる能力のある方)。

ソ ン ク ラ ー

畠 山 信

ソンクラー地方は現在雨期に入り、毎日のように雨に悩まされている。ボートピープルの増加はあるものの出て行く難民も多く、出入りが激しくなるに従い、いくつかの弊害もでてきている。例えば、

ベトナム人の公衆衛生のチーフの交替が三週間前後でなされている為、J.V.Cとの連絡や共働作業に支障がでたり、又キャンプ生活が短くなるので責任感や連帯感に欠け、モラルも低下して、工事用の道具類や資材を持ち帰ったり、清掃を怠ったりという面も現われている。

①排水溝工事

雨による頻繁な工事の中断にも拘らず、ボランティアの人数が増えた事や難民作業者が協力的であった事などにより、作業は順調に進み第一期工事分100mをほぼ完了した。難民作業者へは、J.V.Cより労賃が支払われているが、なるべく多くの人に現金収入を得させる為に雇用の回転をはやめたりしている。尚、10月9日以来、工事に動員された難民作業者数は二百数十人にのぼった。

②公衆衛生

最近までトイレで使用済の紙の処理は砂に埋めるという不衛生な方法をとっていたが、ドラム罐で焼却炉を作り焼くことにした。

キャンプ内にハエが異常に多いのでUNHCRの小泉氏寄贈のハエ取り紙を2度に亘り配布したが、ハエの発生源の発見等の根本的な対策は今のところ出来ていない。難民を動員して、キャンプ内の清掃を行なった。



緑化計画、花壇作りに励むボランティア(ソンクラー)

また、9月中旬より実施してきたキャンプ生活の衛生状況に関する簡単なアンケートにおいて、飲料水の確保状況やネズミなどの有害小動物による被害などについてを知ることができたので、今後のJ.V.Cの活動の参考としていきたい。

③手工芸品材料供給購入販売

チケット製作者の相つぐ出発により規模が縮小されているが、今後はキャンプ内の展示場を通して販売してゆく方針で、楯以外の実用的な手工芸品の製作を思案中である。

④緑化計画

キャンプ内7ヶ所に花壇を作り、花の苗を植えてみたが、陽ざしが強いのか、土が良くないのか、多くが枯れてしまった。今度は種をまいてみるつもり。花壇は外国のボランティア達にも評判を呼んでいる。

⑤保健衛生

相変わらず、結膜炎が多く、戸別訪問して眼薬を点眼、配布しているが、タオルの共同使用、汚れた海での水泳、栄養不良等が原因とみられるが、なかなか根絶でき

ないでいる。

⑥タイ僻地への古着配給

先月からの在庫をソクラーより南へ50キロのナタウイ村に配給した。又、新たに到着した分はキャンプ周辺の村に配給した。

アランヤプラテート

西崎 健司

過去二ヶ月に引き続き、古着を主体にした物資配給を行なった。これにより、日本大使館・霊友会・松下電工及び青年の船の方々から寄せられた衣類等のうち、冬物等の数箱を除く殆んど全部、並びに、ドイツの医療チーム(Sofort Hilfe)から寄贈された石鹸類の一部の分配を終了した。

今月分の詳細は下表のとおり。

①古着の配給について

日本から送られてくる衣類の中には、気候や生活習慣の違いで、そのままでは配れない物が少なくない。たとえば、常夏の国では冬物・毛糸物は必要無いので、これらは米・仏・カナダ等北の寒い国へ出国していく難民達に渡している。

▼物資配給分類表及びタイ・カンボジア国境付近図

期 日	場 所	人 口 (人)	衣 類	固形石鹸	縫 針・ 糸セット	その他の物資
11/6	ブノムチャット PHNOM CHAT	2,500	83箱 (2,000着)	2,000個	100セット	
11/18	ソクサン SOCK SAN	5~ 6,000	103箱 (5,000着)	5,000個	200セット	学用品 (ノート376冊・ 鉛筆10ダース他)
11/24	タパラヤ地方30村 TAPARAYA	20,000	26箱 (500着)	500個		液体石鹸 96本 教科書 106冊
11/25	散村プリミエ PRIMIE	4,000	43箱 (1,000着)	500個	100セット	液体石鹸 96本 学用品 ノート456冊・ スレート67本・ 鉛筆20ダース・ ボールペン100本
11/27	散村バンノンブル BAN NONG PRU	10,000	42箱 (1,000着)	800個	100セット	液体石鹸 240本 ハエ取紙1箱 (2,400本)
11/27	散村バンタプリク BAN TAPRIK	8,000	40箱 (1,000着)	800個	100セット	液体石鹸 240本 ハエ取紙1箱 (2,400本)
11/29	ソクサン SOCK SAN	5~ 6,000	学用品(ノート480冊、鉛筆12ダース、定規90本 白墨15箱、黒板4枚他) 液体石鹸120本、ハエ取紙1箱(2,400本)			

また、日本では当り前のワンピースでも、上は開襟シャツに下はサロン(腰巻)という民族衣装を見慣れた彼らには、とても珍妙に見えるらしくて人気が無い。

しかし、これらも糸・針の裁縫道具を一緒に配ることによって、布地材料として活用をはかっている。とにかく地味で丈夫なものが必要とされている。

②国境付近のタイの村

(Affected Thai)

アランヤプラテート周辺の、タイの村の多くは、カンボジアからの難民流入や、戦禍のために、様々な被害を蒙っている。しかし、脚光を浴びる難民救援に比べ、地味なせいか、国際機関・各国民間救援団体の多くは、その援助に対しては、さ程の熱意を示していない。

この地域のタイの農民の場合、耕作したくとも自分の農地が戦場と近接していることが多く、時には村全体が移動を余儀無くされたケースもあり、彼ら自身農民でありながら、配給米に頼って生活しているのが実状である。



現在行なわれている救援活動の内容は、次の三種に大別できる。

- a 食料供給…主にWFP(世界食料計画)から届けられた米を各戸へ分配する。
- b 医療活動…軍の医療機関の他、二つの民間救援団体(IRC, CRS)の診療所があるが、以前5団体が参加していた頃より、サービス機能は低下している。
- c 学校・教育活動…学校建物の整備・教材の確保等を目的とするが、他国からの援助が皆無のため、J.V.Cへ寄せられる期待は大きい。



橋の丸太が折れ落ち歩いて小川を渡る(バンノンチャン)

③ブラックマーケットの存在、物資の分配・再分配の方法について
過去三ヶ月間、物資の供給を行って来た地域は、いずれも闇市が全く存在しないか、さもなければ極めて小規模にしか行なわれていない村に限られている。闇市の存在そのものの是非は別にして、J.V.Cが供給した物資が、商品として闇市で売買される事態を極力避ける方針のもとに、対象地域を選定している。

供給物資の引き渡しには、2種類の方法を採用している。第一は、直接各個人に分配する方法、第二は病院、役所等の公共機関を通じ、難民自身に再分配を依頼する方法である。第二の方法は、自治組織の完備した村では、簡便であるの

みならず、病人等へはより適切な分配が期待できるという長所がある。この場合も、不適切な分配を防止するため、全物資を一度に供給せず、数回に分割して、各回毎に前回分の利用のされ方を確認するシステムをとっている。

国境周辺の村は殆んどが散村であり、内部での再分配が期待できる村では、一ヶ所へ投入した物資が、彼等自身の手で広範囲に分配され直しているという好結果もあらわれている。いくつかの村では、数十キロも離れた地域まで行き渡っていた例もある。再分配が確認された地域については、広範囲の人々に分配するに足る十分な数量の物資を供給することが適切と考える。

カオイダン

カナイダンでは、現在、昨年ウボンキャンプで自動車整備教習所を開設した経験をもつ熊岡路矢氏が、新しい職業訓練所の開設に取り込んでいる。

このプロジェクトは、ウボン・キャンプでの成功を見た UNHCRからの依頼により開始されたもので、目下、J.V.Cが将来の難民の自立のための基礎となるものとして、最重要視しているプロジェクトの1つである。その内容は、ガソリン、ディーゼル、二輪車、農業機械の4種によって構成されており、自動車整備教習が中心となる予定である。

アメリカの民間救援団体からも同様の案が出されていたが、過去の実績を評価され、J.V.C案の採用が決まった。2月から建設を始め、4月に開校を目ざしている。熊岡氏は2月下旬に一時帰国し、インドシナ難民救援連絡会の場で、現地の状況を伝える予定。

一方、蓑田健一氏が昨年11月よ

り井戸掘りの技術指導にあたっており、難民の中から補助スタッフを募りながら、着々とプロジェクトを進めている。



生き別れになった親を捜して
(カオイダン)

パナッニコム

相沢秀夫

11月25日、隣接するキャンプ(ホールディングセンター)から1,200人のカンボジア人、ランジット(最近閉鎖されたバンコック市郊外のトランジットセンター)、ウボン(ラオス人キャンプ)から主にラオス人800人が移り、この新トランジットセンターが動き出した。レクリエーション、第三国出国のためのオリエンテーションを行う集会所として住居以外の建物十棟が地域毎に分散されている。現在のところ、集会所において学校、職業訓練、語学の学習等の活動は行なわれていない。

センターに入所後一週間以内で出国させるというのが基本方針ではあるが、収容人員8,000人のこのセンターでは、一週間以内の出国は不可能と思われる。すでに閉鎖されたランジット同様、トランジットセンター内で何もすることがない難民にとって、スポーツ、レクリエーション等の価値は大きいと思われる。

センターが開所して間もないため、国際機関、民間救援団体とも

に、実質的な活動を始めたところは少なく、J.V.Cもまだ準備段階で、事務所設置や事務処理等に追われているのが現状である。

J.V.Cとしては、レクリエーションセンターを作ることを計画中だが、集会場の使用については各団体間の都合もあり、まだまだ多大の調整を必要とする。さしあたって、一つの集会場を暫定的に使用してカンボジア人を対象としたレクリエーション活動と運動用具の貸し出しを始めた。難民の中から選んだリーダーもプログラムを作成し、それを実行に移している。

レクリエーション活動には、かなり多数(約200人)の子供達が参加しているので、施設、用具が不足している。また、年令にもかなり差があるので、年令別に子供達は分けられない限り混乱が予想される。そのためにはいくつかの部室を早急に確保して、これらの問題を解決する必要がある。



リズム体操の楽しいひととき、
右は指導にあたる三十三さん
(パナニッコム)

今後、レクリエーション施設の確保とそれに伴う各担当責任者の育成が予定されている。

また、現在行なっているカンボジア児童向けのレクリエーション活動(フォークダンス、簡単な英語の学習指導、遊戯、歌、体操)をラオス、ベトナムの児童にも実施する予定である。

※求められている人材

レクリエーション活動にあたる保母またはそれに準ずる能力のある方、数名。

クロントゥーイ・スラム

福村州馬

① 通路補修

湿地帯の上に造られたスラムの中の通路の補修を4月以来続けて



元気いっぱいの子供たち
(クロントゥーイ・スラム)

きたが、この1,2ヶ月は「現地の人と一緒にやる」という点を強く前面に押し出している。補修箇所周辺の住民と事前に連絡を取り、その人達の都合の良い日を選んで補修を行った。我々の活動の殆んどが「スラムの人達の自立を助ける」事を目指しており、この通路補修のすすめ方もこの線に沿ったものである。彼等を組織するまでにはいかないが、少なくとも毎週末、数名の協力者を得る事ができて、仕事の進み方も非常に早くなり、順調である。

② スポーツクラブ

スラム内のスポーツクラブには、現在約300人のメンバーがおり、会費は月に1バーツである。クラブではバスケットボール、バレーボール、卓球、パドミントン、タクロー、サッカーボール、なわ飛

び等スポーツ用具の貸出しをしているが、その絶対数が不足しており、毎日貸出し時間が始まって2,3時間もすると、もう貸出する道具がなくなるといった状態である。幸い、その運動具購入用にと寄付があったので、近日中に購入して寄贈する予定である。

③ 職業訓練

電気工養成訓練所用をブラティープ財団の協力のもとに計画してきたが、ようやく必要経費の調査が終わり、J.V.Cオフィスからも内諾を得ているので、近々J.V.Cプロジェクトとして正式申請、オープンする予定である。

④ その他

昨年の11月22日のロイカトン祭りの準備作業をパタナ小学校、ブラティープ財団と協力しながら行った。特に我々は小学校裏の池にこの祭のメインイベントである燈籠流しができるよう、小さな橋を構築した。



朝礼で“四季の唄”を歌うボランティア、右はブラティープ先生
(クロントゥーイ・スラム)

ブリラム県児童施設建設プロジェクト

創刊号にて、このプロジェクトに「春期」という語を用いたために、ボランティア活動が一時的なものであるかの様な印象を与えたのではないかと懸念しています。

現地のニーズは、春夏の日本の休暇時に増大するものではなく、絶えずあります。そのことを認識した上で、御応募下さい。

する側の都合で「善意」を押しつけるのではなく、される側の状況を理解した上で、相手側の立場に立って自分のできることを探るのがボランティアの守るべき基本姿勢ではないでしょうか。

現地では「三ヶ月以下の短期ボランティアは困る。」と言われています。しかし、たとえ長期の活動が望ましいといわれていても、何らかの犠牲無くしては一ヶ月の休みをとることさえ難しいのが日本の社会の実情です。

こうした現地のニーズと日本の社会の実情との齟齬をできるだけ小さくすべく立案されたのがこのプロジェクトです。



〔活動の意義と背景〕

いくら状態が改善されたとはいえ、難民が弱く不安定な立場に置かれていることには変わりありません。しかし、タイの農民達の生活がキャンプ以上に貧しいことも事実です。確かに基本的にはこれはタイの内政問題でしょうが、間接的な形ではあれタイの貧困層を援助することが、彼らの難民に対する感情を和らげ、ひいては貧しい者がより貧しい者を搾取するという現在のアジアの貧困の構造に、何らかの変化を与える契機となりはしないか。

そうした遠大な構想の一環としてこの小さなプロジェクトがあります。

東北部はタイの中でも最貧困地域で、工業優先の政策に取り残され、安価な労働力提供の場としてしか意味を与えられていない過疎地域となっています。一方バンコクの中央駅には毎日のように東北部の寒村で食いつめ職を求めて彷徨う人々が流入してきています。他の発展途上国における大都市と同じく、農村に対するシワ寄せの結果、人口爆発に悩まされている点はバンコクも例外ではありません。この人々は、安定した職場も住居も無く、J.V.Cもプロジェクトを展開しているクロントイのようなスラムに住むようになります。こうした背景には東北部の農村の貧困が横たわっているのです。

〔活動内容〕

東北タイのブリラム県の中から、特に貧しい13ヶ村を選び、1つの村に5,6名のボランティアを派遣し、英語が話せるタイ人学生と協力して、児童施設建設に従事します。又、タイ語の初等教科書などの学用品及び古着の配布も行なう予定です。

〔実施期間・費用・宿泊施設〕

- 2月中旬～3月末迄（ただし、現地の都合により開始時期は多少遅れるかもしれません。）
- 全額自己負担（往復の飛行機代を含めて1ヶ月約15万円が必要です。）
- 民家もしくはボランティアホームに宿泊。

〔申込方法〕

折り込みの応募用紙に必要事項を記入し、志望動機あるいは下記の参考文献の感想文を市販の四百字詰原稿用紙3～5枚程度にまとめ（これは文章の上手下手を見るのではなく、活動への熱意、理解を深めてもらうためです。）

100円切手2枚を同封の上、当事務所宛にお送り下さい。なお選考の結果は封書にて後日連絡致します。

『東北タイの子』カムブーン・ブンカヴァー著
勲草書房

東北タイ概況

田島 誠（アランブラテート）

東北タイのうち南部（ブリラム県、スリン県など）は、クメール系の住民が多く、言語も殆どクメール語に近いタイ語を話す。主食は普通の米である。一方、北部はラオス系の住民が殆どで、言語はタイ語化されたラオス語（イサーン語といわれる）を話すのが一般。主食はもち米である。

地形的には、低地が2割、高地が8割を占める。低地では稲作（水田）が、高地では稲作（陸稲）と畑作（カサバく根から澱粉を作る）などが行われており、陸稲はほとんどが自給用である。したがって、現金収入は澱粉の原料として日本にも大量に輸出されているカサバによっており、いたるところでカサバ畑がみられる。

カサバは、栽培するのに殆ど水の心配をしなくてもよいので水不足の高地に適しているのであるが、このカサバを作る為に山の斜面を次々と森林伐採し耕地化していることによって起こる弊害が近年指摘されている。

その一つは森林乱伐に伴う洪水であり、もう一つは土の酸化が進みいわゆる耕地の荒廃である。つまり、森林を切り開いたために水の流れが変わり洪水を起こす原因になっているし、カサバも植えてから2～3年の間は順調に収穫があるのだが（土地が肥えているから）、その後は土地が砂漠化して全く作物のできない土地になってしまうということだ。この問題に対して政府はあまり積極的ではなく、このままでは東北タイの農地は荒廃しきってしまうという危惧を持つ人さえている。

したがって、土地を灌漑して稲作を増やすことが重要な課題となっている。今回12月4～6日に訪れたバン・タ・マタイ・ワーンでも至る所にカサバ畑がみられ、これを憂慮したFor the Little Hungryの人達によるもみ米の援助（実際にはバンコクからの運搬がうまくいかず実行されなかった）や農業共同組合の代表（コラットから来ていた）による米作の振興が行われていたが、水不足は必至だということだった。

タイ政府も、現在“ノンワイプロジェクト”を実施中だが、東北部は起伏が激しく莫大な資金を必要とするため、なかなかはかどらない。J.V.Cとしても、今後何らかの援助ができないか、考慮する必要があるように思われる。

からの外資導入（合衆国・日本など）により、バンコクの大都市化が進み、それにつれ物価上昇率も伸びたのだが、農村問題に対して何ら有効な政策



を持たない政府の為に、また都市から農村にも商品経済が流れ込んだ為に、都市と農村との隔差は広がるばかりであった。

没落した農民達は負債農民となり、一度負債を負った者は仲々そこから抜け出すことは難しく、やがては土地を手離し小作農となるか、都市へ出て底辺労働者となるしか道がなかった。特にこの変化は、バンコク周辺の米びつと呼ばれる中部タイに於て顕著で、地主層と小作農の分離は他の地域に比するものない程である。

これはタイの農業の変化を中部タイが任ってきたのを示す事例で、それ以外（東北タイも含めて）の地域では、相対的に見た生活のレベル低下以外には何ら農業自体には変化がなかったことを示している。

都市における雇用枠は限られ、農村で発生した低賃金労働力を吸収する力はない。それ故、没落農民達はわずかの土地にしがみついて子供達を都市に出稼ぎにやるとか、出稼ぎ季節労働者となるとか、小作人となるしか手段を持たない。タイ国唯一の大都市バンコクにみられるサムローの運転手や売春婦、工事現場の労働者などのほとんどすべては、こういった貧困農村出身者である。

この様に、クロントゥーイ・スラムに代表されるバンコクに渦巻く貧困の根は、タイ農村としっかりと繋っているのである。

この根を絶つ為にはどうしても根元にある農村問題に目を向けざるを得ないであろう。それは政治の位相で語ろうとも、経済の位相で語ろうとも、ボランティアの位相で語ろうとも、各人が各人なりのアプローチによってこの問題の解決に一步でも近づくべきだと思う。

J.V.Cがこれからタイで活動する場合、必然的にこういったタイ国内の矛盾に目を向けざるを得ないであろう。

◆ ◆ ◆
インドシナ戦争以降の商品経済の流入、それ以前

熊岡氏からの手紙

J.V.Cプロジェクト必要人員一覧表 1980年12月30日現在



	内 容	必要人員	期 間	リーダー	備 考
ウボン	自動車整備 ◎織物学校運営	1人 男性1人 女性1人	長 期 長 期	熊 岡 山 下 青 木	自動車整備工資格者
ノンカイ	◎ノンカイのリーダー	1人	6ヶ月以上	(森)	英・仏・タイ・ラオス語のうち1つ以上できる人
ソンクラー	建築・土木 公衆衛生	男性2人 女性1人	長 期 長 期	浜 口	
アランヤ ブケート	供給物資調達・運搬	女性1人	長・中・短 いずれも可	西 崎	詳細は面談の上決定
カオイダン	自動車整備 (大型・普通・二輪) 発電機・発動機・農業機械取扱 修理 農業、河川漁業指導	2人 2人 2人	長期 (3ヶ月以上) (交代でも可)	熊 岡	各種資格者 外国語が1つできる人
クロントグーイ	大工仕事 教育環境整備 etc. 本のビニールカバーとじ	1～2人 2～3人	1ヶ月以上 短期でも可	福 村	タイ語 (英語も可) できる人 詳細は福村または岩崎へ

◎は至急 (到着が遅れたため、文中と一部重複、変更があります。)

最近、ボランティア希望者として来る者の中に、J.V.Cを旅行代理店かサービス会社のように思っ、非常に自分本位の姿勢で来る者がいるので困っています。

案内してほしい、ついてきてほしい、フライトをとってほしい、自分はここへ行きたい、他はいやだ等々。

時間の余裕があれば、もちろん多少のことはやります。しかし、私達自身がそれぞれプロジェクトを抱えているのです。

言いたい事は、「自分の面倒もみられない奴は来るな!」「自分の勝手しか主張できない奴は来るな!」「はじめてそのキャンプやプロジェクトを切り開いた人達の苦勞も少しは考えろ!」以上です。(抜粋)



寄稿・投書募集

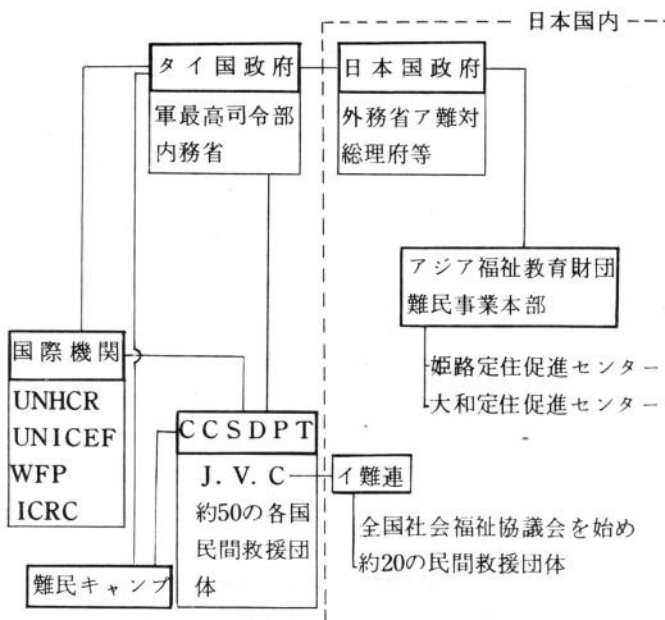
皆さんの積極的な投稿を、広く求めています。800字前後をお願いします。

〒151 東京都渋谷区代々木神園町3-1

OMYC内 JYVA気付

J.V.C Tokyo Liaison Office 編集部

☎03-460-3994 (月木土PM5～11)



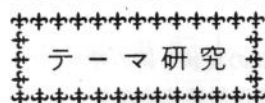
★CSDPT (タイにおける避難民に対する救援連絡調整委員会)

1975年、タイ政府と協力し、ラオスからタイへ流入してきた難民に対する援助を行なうボランティア組織として結成された。

それ以来、タイにおける難民救援活動の調整連絡にあたっている。79年のカンボジア難民の流入以来、加盟する団体は倍増、現在17ヶ国の50団体から構成されている。80年には、UNHCRも1100万ドル以上の計画をこれらの団体と協力して遂行した。各キャンプで実質的な援助活動にあたっている救援団体の集合体である。

★イ難連 (インドシナ難民救援連絡会)

1980年2月に、日本国内でインドシナ難民救援活動に携わっている民間諸団体を中心に日赤、外務省を加えて結成され、J.V.Cの支援にあたっている。



日本の中の「難民」たち

連載第2回

水野孝昭

●「受け入れ」について

「難民の受け入れ」という言葉がよく使われるが、「受け入れ」とは、具体的には何を指すのだろうか。

「受け入れ」という言葉には、二つの異った概念が含まれている。一つは、第一次庇護 (First Asylum), もう一つは、再定住 (Resettlement) 許可である。

第一次庇護とは、難民が自国での危険迫害を逃れていった国で、まず与えられる入国許可、その他の一時的な保護措置をいう。日本の場合は、南シナ海を漂流していたところを救助されて、日本に移送されてきたベトナム・ボート・ピープルが対象となる (前号の分類②参照)。前号で「日本全国にある一時滞在施設は、ソクラーのベトナムボートピープルキャンプと同じ性格を持つ」と書いたのは、どちらもこの第一次庇護を与えているという意味である。

この第一次庇護が、あくまでも暫定的、一時的な保護であるのに対し、再定住許可は、読んで字の如く、難民のその国への定住を認めること、即ち、難民を何らかの形でその社会の構成員として認め、彼らに生活の場を提供することに他ならない。

祖国を逃れた難民は、多くの場合まず辿り着いた国で第一次庇護を受ける。最初に辿り着いた国にそのまま再定住することを避難地での同化定着 (Local Resettlement) と呼ぶ。タイもかつて1954年のディエンビエンフーの戦いの時、ベトナムから逃げてきた難民に対して、この同化定着を認めたことがあるが、現在は認めていない。少しでもタイへの再定住を許可すれば、一層多くの難民が流入してくることが予想されるからであろう。

したがって、タイのキャンプで第一次庇護を受けた難民は、危険迫害が去るのを待って自国へ戻るか (Repatriation と呼ぶ)、どこか他の国へ定住を申請するかを選択を迫られる。後者の申請が許可された時は、キャンプからバンコク周辺の一時収容所 (Transit Center) へ移され、「第三国への出国」を待つことになる。

●日本が第一次庇護に踏み切るまで

以前から日本に滞在していた留学生、研修生のグループ (前号の分類①) を別にして、日本に最初にインドシナ難民が到着したのは、サイゴン陥落直後の1975年5月12日のことだった。9人のベトナム・ボート・ピープルが、米国船グリーンハーバー号に

救助され、千葉港にやってきたのだ。

政府は、彼らがパスポートもビザも持っていないため、水難者として処置し、出入国管理令18条に基づいて、水難上陸許可を与えた。しかし、この許可を与えるに際しては、難民の受け入れ国が既に決まっており、その出発便が予約してあることが前提条件とされていた。

同年7月からは、日本船に救助された難民も続々日本にやってきた。しかし、彼らに与えられた上陸特別許可 (同12条) にも、前記の条件は付与されており、在留許可期間も当初は僅か15日間だった。

こうしてみるとこの時期日本は、単に難民の通過上陸を認めたに過ぎなかったといえよう。

1975年6月、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) から、難民の定住先が決まるまでの一時滞在を許可するよう要請があり、政府は難民に住む家がある限りにおいて、再定住先が決まっていなくとも、一時滞在を目的とする上陸を認めることにした。

しかし、ベトナムから逃げて来たボート・ピープルが日本に家を持っているだろうか。立往生した彼らの窮状を見かねた宗教団体が宿舎を提供した。

更に、救助した船が外国籍の場合は、もし難民の再定住先が決まらなかった場合、その船舶国または実質的船主国が彼らを引き取る旨の口上書を、その政府が発行することが日本上陸の条件とされていた。

そのため、やっと日本に辿り着きながら、積荷関係、長期滞船によるコストの関係上、船がその口上書の発行を待ちきれず、難民の日本での下船を諦め、再び出港するという例が3件ほどあった。日本への上陸が許されず、そのままアフリカ・香港・ケープタウンへ乗せられていった難民たちが、その後一体どうなっていったか、日本政府は把握していない。

難民は一人たりとも日本に居つかせない。他国の引き取りが無くば、海の藻屑となろうと日本の関知するところではない。これが1978年12月のベトナム難民対策連絡会議に至る迄の政府の方針だったのであり、それは又国民の閉ざされた意識の反映でもあった。

我々日本人は、アジアの貧しい国の難民追い返し政策を非難する根拠を何処に見出すのだろうか。

この条件は、上記の会議で、日本が最初の寄港地の場合は、口上書無しでも上陸を許可すると緩められたが、最終的に廃止されたのは、実に1979年の7

月13日付け閣議了解に至ってであった。

上陸許可の種類は、1977年11月以降は、船籍国に関わりなく、在留期間30日の上陸特別許可が与えられている。在留期間はその後次第に延長され、現在は180日間になっている。

(参考資料:

「インドシナ難民の現状と国内援護」内閣官房インドシナ難民対策連絡調整会議事務局、黒木忠正「新聞報道にみるベトナム難民」外人登録201号～203号)

書 評

「アジア人と日本人」

須 藤 達 也

鶴 見 良 行 著 晶 文 社

「アジアと日本の民衆が、互いに従属したり搾取したりすることなく平等に生きるという当然の目標を設定してみる。この目標に向かって動こうとする既存の集団、階層は今日の日本には存在しない。」

(228頁)という問題意識が著者鶴見良行氏の出発点であり、その結論を「日本人を構成する主要集団がこのようなとすれば、アジアの民衆と平等に生きるためには、日本人であるあり方を変える以外にない。」(229頁)とする。

◆ ◆ ◆
この本の中で一番読みごたえのあるのは、新たな日本人のあり方を具体的に述べてある第一章の「日本人ばなれの生き方」である。

「日本人ばなれの生き方」とは、帝国主義的経済侵略的な日本のアジアへの対応に背を向け、違った形でアジア人と結びつく方法を探りそれを実践していく生き方である。しかし、これには二重の裏切りがある。日本がアジアに対して〈する側〉であり、アジアが〈される側〉であるという構造が存在する以上、いくらアジアの民衆の立場にたったとしても、それは所詮その大きな構造においてのみなしうる事、つまり、〈する側〉の人間が〈される側〉の国で享受しえた自由であるにすぎない。その意味でアジアの民衆に対する裏切りがある。もとより、精神の上では帝国主義国家に対する裏切りでもある。その上で、筆者は、「日本人ばなれの生き方」の実践に於てその運動が長続きしていくためには、「それが参加者個人に何らかの形で愉悅をもたらさなければならない」と述べている。

◆ ◆ ◆
アジアの民衆と真の意味でつきあうためには、「おもしろいなあ」と思いながら、市民運動を展開していかなければならないのだ。言い替えれば、自分の生き方が決して無理なく普通でなければならないということだ。しかも、このような生き方をするため

には、余程の強個な人間性と社会を冷めた眼でみる姿勢が必要とされ、それは必ずしも広く人々にアピールする生き方ではないようにも思える。

「移動と定住」という言葉に凝縮されている著者の見解は、私

たちがアジアを旅する場合どのようにしたらいいかという示唆に富んでいる。具体的には、各地で控えめな生活をする事でその国の人々と接しながら、生産に携われるような人の出現することが望ましくそのような人たちを通じて旅行者が流れていく、といった二重の組み合わせによるネットワークを作っていくことが必要だ、というのである。これが、アジアの民衆と対等につきあう際の、ひとつの基礎であろう。

◆ ◆ ◆
著者の鶴見良行氏は、今、「現状を考える人々の会」のメンバーであり、ベ平連(ベトナムに平和を、市民連合)を創った小田実、吉川勇一らと共に、「日本に執着しながら、かつ日本を批判していく生き方」に取り組んでいる。また、季刊誌『世界から』を発行している「アジア太平洋資料センター」(PARC)に所属し、自ら「ベアフット・リサーチャー」(素足の探索者)と称し、フィリピンのバナナ問題を中心とした活動を行っている。

何もとり繕わず、アジアの人々と“はだし”でつきあいたいものだと思う。



編集後記

ここに謹んで新年の御慶びを申し上げますと共に、「Trail & Error」第2号をお送りいたします。正月休みを返上して、10人のメンバーによる合宿を行った末、いまようやく出来上りました。

メンバーは素人ばかりですので、何かと至らぬところがありますが、今後とも、一同力を合わせて、少しずつでも良いものにしていきたいと思っておりますので、よろしく御支援を賜りますようお願いいたします。機関誌についての御意見、その他、どんなささいなことでもお気づきの点がございましたら、是非、編集部までお知らせください。

尚、この機関誌はすべてボランティアの手によって作られております。「Trail & Error」第2号の編集に携ったメンバーは以下のとおりです。(敬称略)

大久保 俊彦 滝 本 保 典
大 塚 雅 也 中 山 幹 彦
鹿 妻 英 子 福 地 良 司
河 井 淳 一 堀 み え 子
川 島 保 男 水 野 孝 昭
黒 川 京 子 三 橋 玲 子
税 田 芳 三 峰 野 美 智 子
桜 井 光 二 渡 辺 厚 子
須 藤 達 也 (アイウエオ順)

編集部では、機関誌編集にあたって情報の収集・整理、原稿立案・清書、レイアウトなどをしてくださる方を求めています。熱意のある方、興味のある方は、どうぞ編集部まで御連絡ください。

会 計 報 告 11/18 ~ 12/15
(単位は¥, 現在1パーツ約10円)

内 訳	収 入	支 出
前月残	4,604,639 ⁸⁷	
寄付・送金	538,310 ²³	
事業費		340,375 ⁵⁰
事務費		111,367 ⁰⁰
助ける会給料		52,756 ³²
その他		750 ⁰⁰

差引残高 4,637,701²⁸

○事業費内訳 (単位はパーツ)

ノンカーイ	活動費	22,205 ⁵⁰
ウボン	活動費	51,989
ウボン	ハンディクラフト	10,000
アランヤプラテート	活動費	38,793
アランヤプラテート	衣類輸送費	19,336 ⁵⁰
パナニコム	活動費	12,013
クロントゥーイ	活動費	45,934
クロントゥーイ	先生給料	2,400
ソクラー	活動費	17,600
カオイダン	井戸掘	20,000
BKKボランティアホーム	設備その他	6,618 ⁵⁰
J.V.C事務所		55,206
全プロジェクト調査報告作成費		8,280
その他		30,000

○今月の寄贈品目、寄贈者(敬称略)

衣 類 石川 誉、宮崎市民一同
全社協、モラロジー研究所
厚木ライオンズクラブ

デジタル時計 関根秀爾
タイプライター 高瀬則元
ラジオカセット 六車 剛
英文資料コピー 柳原和子
クロスロード 須藤達也

○今月の寄付、送金者 (敬称略)

山崎宏子、藤井真水、山田隆光、木戸きよみ
水迫道子、大谷のり子、高野山真言宗
浄土真宗本願寺派、国際教育学会
高橋・朝倉他一同、山辺中学校
恵愛会茨戸病院一同、創価大学
広島学院(トダタカヒロ)
盤城市立タイラダイ第2中学3年2組
広戸直江、池見恒則、野木啓子、曾我規己夫
関東学院大加藤ゼミナール
松戸カトリック教会

あなたの善意の送り先

J.V.C東京エリゾンオフィス 銀行口座
三井銀行渋谷支店 口座番号 4326579
「文書振込」と指定し、備考欄に振込人の住所を明記してください。

新しい事務所を捜しています

J.V.C東京リエゾンオフィスでは、事務処理量の増加に伴い、新宿、渋谷付近に広さ15坪程の事務所を捜しています。

現在は、オリンピック記念青少年総合センター内にある日本青年奉仕協会（JYVA）の一室を三つに区切って、他の22のボランティアグループと共同で使用しています。ところが、最近は資料、書籍その他手工芸品の在庫等が増えたために作業場が狭くなり、また電話の対応にしても、現在公衆電話を使っている状態ですので、そろそろ活動に支障をきたす恐れができました。

これまでにいくつか不動産屋を訪ねて歩いたのですが、たいてい「大勢の学生がドヤドヤ出入りするのは困る」と断られることが多く、今のところ見込み薄です。適当な物件を御存じの方は、どうぞ御紹介ください。

また不用の事務機器、用品等をお持ちでしたら、是非譲って頂きたい思います。

よろしく願いいたします。

年間購読についてのお知らせ

J.V.C Tokyo Liaison Officeでは、インドシナ難民救援活動の輪を広げるため購読者を募っています。

購読者の方々には毎月機関誌「Trial & Error」を送付すると共に、講演会・写真展等のお知らせを致します。

年間購読者の種別と購読料は次の通りです。

賛助購読者（団体・法人） 年間1口10,000円
1口につき毎月4部送付
一般購読者（個人） 年間1口3,000円
1口につき毎月1部送付

申し込み方法

郵便振替にて。口座番号

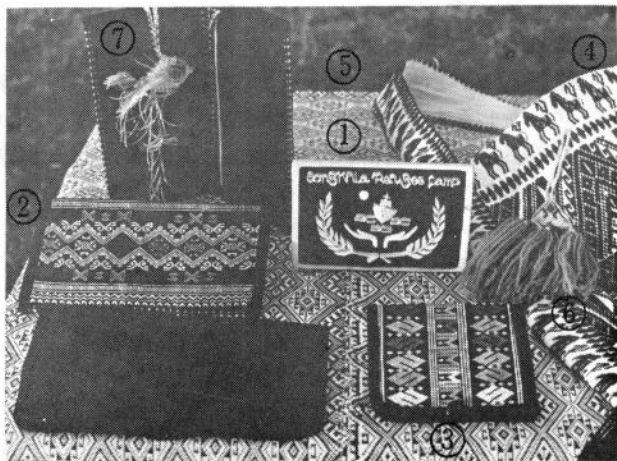
東京3-54186

〒151 東京都渋谷区代々木神園町3-1

OMYC内JYVA気付

J.V.C Tokyo Liaison Office

ハンディクラフト紹介



写真番号	品名	大きさ	製作場所	販売価格（円）
1.	桶	ワールド	ソクラー・キャンプ	960
		大		720
		中		600
		小		480
2.3	財布	大	ウボン・キャンプ	1200
		小		840
4	ショルダーバック	大	ウボン・キャンプ	1800
5	テーブルクロス	小	ウボン・キャンプ	1800
6	メオ族のお守り		ランジット・トランジット・センター	1200
7	プラスチック工芸品		カオイダン・キャンプ	240

J.V.Cでは、難民救援活動の一環として、ソクラー、ウボン等のキャンプで仮生活している難民たちに手工業品の製作を依頼し、その販売を行なっています。

これらの手工芸品を通じて、日本の皆様に難民たちの心を理解していただき、難民問題に関心を持っていただければ幸いです。

尚、販売価格の20%は、寄附金として難民救援に使用させていただきます。

毎月15日発行

発行人 税田 芳三

編集人 河井 淳一

発行所 J.V.C Tokyo Liaison Office

〒151 東京都渋谷区代々木神園町3-1

OMYC内JYVA気付

☎03-460-3994

月、木、土 PM5~11

表紙デザイン 桜井 光二

印刷所 ゆたかプリント

定価1部200円

（諸経費増につき、定価変更しました。）